

阿呆がダンスダンスダンス♪

アフオーダンスにあと少し？



三浦礼未

簡単な状況説明

野村萬齋氏が世田谷パブリックシアターの芸術監督として継続してやっていることの一つに『MANSAI解体新書』という企画があります。毎回アーティストやパフォーマー、学者さんから演劇、古典芸能の方まで、実に幅広いゲストを迎え実際にパフォーマンスなども組み合わせて『演劇』あるいは『舞台芸術』というものを解体し分析していこうというもの。

毎回なかなか面白い企画があるのですが（コロッケさんをお呼びしてのものまねの解体などということもありました）、その2006年7月24日に行われた第9回の『解体』で扱われたのが『アフォーダンス』という概念でした。これは型にも通じるなかなか面白い考え方なのですが、詳しいことはこの後の本編に任すとして、登場したのは司会役の萬齋氏とゲストは学者の先生と書家の武田早雲先生でした。学者の先生についてはあえて名前は伏せます（というより資料がない。文章を読んでいただければわかると思いますがあえて調べる気もしないので）。

実を言うと私はこの回には行っておりません。行った方の詳しい実況的メモによる報告を聞いて書いたものが以下の文章ということになります。行った方の話をいくつか読みましたが、皆さん混乱しておられるようでした。で、手持ちの『認知革命』にあるアフォーダンスの解説と合わせながらじっくり考えてみた結果が『阿呆がダンスダンスダンス♪（別に意味はなく単なる言葉遊びです）』に結実したという次第。

このアフォーダンス前にも書いたように古典芸能の型にも通じる面白い概念で、しかもおそらくは舞台芸術全体にもかかわりそうなものなのでブログから引っ張ってきた文章を今回こちらに掲載することにします。

なお、後で出てくるキムさんですが、ダンサーの伊藤キムさんのことです。『解体』の第1回に出演され、萬齋氏と二人、即興でダンスをされたとのこと（この時も行っていない・・・苦笑）

○アフォーダンスへのプロローグ 2006/07/26(Wed)

人間は外界を認識し、対応した反応をします。これを認知といい、古くは哲学から続く重要なテーマの一つとなっています。

哲学といえば、デカルトのいった『我思う我あり。』。これは『自分があると思うから自分が見ている世界はある。』と言い換えることができます。個人としてある人間の思考に関わる世界としてはそれは事実であって、養老先生の言うような『唯脳論』的な理解ができるわけです。

しかし、その個人が亡くなったとして、それでこの外界がなくなってしまうかということ、当然のことながらなくなることはありません。亡くなった人にとっての世界がなくなっただけで、今生きている人々それぞれが認識する世界は決して消滅することはない。

外界はそれ自体で存在しており、存在するからには観察したり実験したりできると科学的思考を好む人々は思います。そして認知に関してそれを適用しようとする時、外界があってそれをそのまま受け取るシステム(あくまでも生理的、生物学的な体のシステムとして)があるから人間は世界の存在を認識することができるのだと考えます。しかし、この場合、意味づけという問題が出てきます。

脳が世界があると思うからあるのだという考え方では問題がありません。世界の部分を捉えてこれはこういうものがあるのだと思った時点でそのものは人間にとっての役に立つとか立たないとかの価値付がされているからです。この人間という主体の中における意味や価値をつけるという数値化できないことを科学的思考を持つ人たちは嫌がる傾向があります。

ゆえに、上の認知モデルにおいて、ものがそのものに対する人間の対応の仕方を決める。ものの中にそのものの持つ意味や価値が存在し、それを受け止めて人間が反応するのだ。世界を認知するのだという考え方が成立することになります。この考え方の総まとめというか、考え方の発展系がアフォーダンスということになるのです。

つまり、抱きしめやすい情報を持ったものを人は抱きしめる(抱きしめることをアフォードする)。あるいは食べるものだという情報を持ったものを人は食べる(食べることをアフォードする)。という言い方ができ、これこそがアフォーダンスの根本的考え方であるといえるのです。

『認知革命』ハワード・ガードナー著(産業図書)より

○みもふたもない言い方で 2006/07/26(Wed)

ものを認識するということを簡単に言ってしまえば。ひとつは人間がものを認識し価値づけする。もうひとつはものが自らの持つ意味を人間のシステムに働きかけて認識させる。といういいかたもできます。

ロボットを例にとって考えて見ましょう。まずロボットにボールの形を記憶させ、これをつかむというプログラムだけを組み込みます。もちろんロボットの手や足などのメカニズムは物をつかむようにできているという前提です。

するとボール状のものをみるとロボットはつかむ行動をするでしょう。これをアフォードンス的にいえば、ボール状の形というデータ（情報）がロボットに自らをつかむという行動を起こさせた（アフォードした）ということになるのです。ただしこの場合、ロボットの方に推論や志向性というものはありません。だからボールがゴムだろうと、鉄だろうと、重かろうと、軽かろうと、もっと言ってしまえば、とてもつかめないほどの大きなボールでさえつかもうとしてしまうに違いありません。

そこでさらにプログラムを追加します。持てそうなボールだけをつかむように。と。ギブソン先生に言わせるとこれは経験を増やし、さらに複雑なシステムが構築されたということになるでしょう。そこで、今度はロボットはボールの重さや大きさというものを認識できるようになる。その中で自分の中のシステムに基づいて条件の合うボールにのみ反応するようになる。というよりも、システムに適合した情報を持つボールが自らをつかむようにロボットにアフォードしたということになるのです。この場合ロボットの中には数値化できない（再現性のある実験のできない）推論や志向性はまったく存在しないとギブソン先生は言うのです。

逆にロボットを人間に置き換えて、人間が見るから世界があるとした場合のあり方を考えて見ます。この場合は実に簡単、ボールはつかむものだ人間が思ったからボールにつかむものだという意味が生まれたと考えるわけです。人間が思わなければそれはただの丸い物体としてそこに転がっているというわけ。

でも、変でしょう？まるで鶏が先か卵が先かを言い合っているようなものだと思いますか？

たとえばギブソン先生の考え方をもうちょっと推し進めて見ます。カブトムシだと頭が悪すぎるので、ねずみで考えて見ましょう。

ねずみがちょっとがんばれば上れそうな木の箱の中に入っているとします。蓋はかぶさっていません。ねずみは壁を上って外へ出て行きます。この場合、この壁がねずみに上れるという情報を与えたので、それに条件反射的にねずみが反応して上っていったとなります。ところが、何回かやっていたら、ねずみは壁をかじって穴を開けて外へ出て行ってしまいました。すると上るこ

とをアフォードしていた壁は今度は穴をかじってあけることをアフォードしたことになるのです。上ると穴を開ける。この二つのことには何の関連もありません。するとこの壁には二つの情報が組み込まれていたことになるわけですね。じゃあ、なぜねずみは最優先であった上ることよりも穴を開けることを選んだのか。ねずみの中のシステムは変わっていません。じゃあ？ねずみの体調が変わったとか、風の流れが変わったとか…。つまり複雑な認知行動を説明しようとする無敵大の情報数の拡張をしない限り説明できないということになるのです。ねずみはより大變な上る行動より、いつでも出入りできるように穴を開ける行動を選んだ。そういう推論や志向性を組み込めば簡単に説明できるのですが。

人間がすべて意味的にニュートラルなものに意味をつけるのだと考える場合も同じようなも問題が生まれてきます。たとえば三角錐に『いす』という概念を与えられるかということです（笑）。これは『いす』だと言い張ることはできるでしょう。しかしどうやっても先のとんがった三角錐を『いす』と認めることはできない。意味づけというものの無敵大の拡張もやはり不可能なのです。

私個人としては、人間側の推論と志向性ともものの中に含まれるデータ（情報）が組み合わさるからこそ意味や価値のあるものとして認識することができるんだと思うのですが。でも、多くの学者さんたちが実にこの二つの立場を主張して譲ることなく論争してきたという歴史があるわけです。だからこそ、『鶏が先か、卵が先か。』ということになるんですけど。

ということで大体アフォードンスの大まかな概念はこのようなものなのです。で、『解体』において学者先生が何を考えていたか、萬齋（野村萬齋）氏と双雲（武田双雲）先生が学者先生の期待をいかに裏切り続け、かみ合わない展開をしていたかは、またちょっと後で書き込むことにします。

ただ、これだけはいえるんです。人間には明らかな志向性があります。それは萬齋氏と双雲先生にも言えますが、学者先生にもあったということ。

ところで、上に書いた文献ですが、たまたま私が9年前に卒業した通信制大学の卒論(一応哲学科。笑)が世界観、世界の認識とはいかなるものかというようなテーマだったんです。その時に買いこんで、線を引っ張りまくった本の中の一冊です。だからギブソンやらアフォードンスという言葉聞いた時、どこかで聞いたような気がしていたわけです。

○もののあはれ 2006/07/27(Thu)

学者先生『アフォードンスをもののあはれといたい。』と仰ったそうですが…。

ものあわれ(大辞林)

(1)平安時代の文学をとらえる上での文学理念・美的理念。外界としての「もの」と感情としての「あわれ」とが一致する所に生じた、調和的な情趣の世界をとらえていう。本居宣長が指摘し、その最高の達成が源氏物語であるとした。

(2)自然・人生・芸術などに触発されて生ずる、しみじみとした情趣や哀感。

ということですので、確かに『ものはものあはれをアフォードした。』といえることではあるのかもしれませんが…。とくに『外界としての「もの」と感情としての『あわれ』とが一致する所に生じた、調和的な情趣の世界をとらえていう。』というところがそうでしょう。ものが持っている『ものあはれを感じさせる』という情報と、人間の持つ『あはれ。』という感情(システム)が合致したところに生まれる世界観ということでは。でも???となりませんか?ものあはれを感じる心の動きってデータ化不能なんですよね。つまり生態心理学的実験が不可能だったこと。第一心そのものがコロコロ変わってっちゃって再現性不可能。

ギブソン先生の認知に関する理論というのは、あくまでも上に書いたような再現性のある実験可能な、つまりが具体的な事物に対する人間の肉体を使った行動パターンに関するものであって、文化や社会、はたまた感性などのような数値化できない、言語というややこしいものをベースにした要素から生まれてくる志向性を持った感情や心であるところの『ものあはれ』には対応できないし、意図的に無視してるはずなんです。

この手の間違い、結構この先生やらかしてます。まず、この先生がよく言う『試行錯誤』。『試行錯誤』って言葉自体に志向性があるでしょ?『何かをしたい。』から情報を取捨選択して、要らない情報を捨てつつ必要な情報でシステムを構築していくわけだから。ギブソン先生の言ったのはそうじゃなくて積み重なっていく経験がシステムを構築していくということなので、志向性とか、『これはいい情報であれば悪い情報。』だという推論はその存在自体を始めから否定しているのです。だから適正な情報を持ったものに出会うと、無条件にそのものの持つ情報が人間の中のシステムに作用して一つの行動パターンを自動的に選択させる。単純化しちゃうとこういうギブソン先生の理論とはまったく違うことをこの先生言っちゃってるわけです。

まあ、崖のぼりの例なんかは確かにそういう人間っていますけどね。なんだかわからないけど、見たら一瞬にして学んでもいないのに要領よく一番いい道筋を見つけちゃう。っていうような人間が。でもこの場合も問題になるのが、条件反射的にその道筋を見つけるとして、じゃあ、なんでそういう道筋を選んだのかということ。人間ってあえて難しいルートを登って山登りしたりするじゃないですか。いつでも何でも一番効率のいいルートを選ぶわけじゃない。結局そこにどうしても『意思』という形の志向性が入ってきちゃうんですよね。

カブトムシは経験をつむこと(試行錯誤とはいいいません)で、より効率のいいシステムを構築すると

その行動だけをとるようになるでしょう。でも人間は経験をつむと行動パターンが広がって、あえて効率の悪いことでも選ぶようになる。極言すれば、守りたい人に向かって飛んでくる鉄砲の弾を体を張って止めた場合(死にます。普通。苦笑)、それは何にアフォードされてそうなったのかということです。ギブソン先生の理論なら、鉄砲の弾にアフォードされなくちゃならないわけで(笑)。しかし実際は『この人を守る。』という志向性があったからそういう行動に出たわけですよ。その人が守りたくなるような情報を持っていたとして、その情報ってのは経験ではなくて、好みとか感覚による心の問題になるわけで。これもまた、まさに志向性ということになるのです。

思うにこの先生、このあたりの論理構成が結構あやふやな気がします。その上、思いつきで格好いい言葉を使いたがるから、聞いてた人がみんな混乱しちゃうんじゃないかとも思えるんですよ。このことをふまえた上で、次の項目で実験に関して考えてみることにします。

○見て情報を得るつまり視知覚 2006/07/30(Sun)

ギブソン先生が重視して扱っていたのがタイトルに書いた視知覚だったのですが(ものを見ることでそのものに存在する情報を読み取るということです)、一般の生態学者はどうやら触知覚の方が好きらしいです。つまり、ギブソン先生が基本的に『ものを見る』ことをベースにして組み上げた理論を、『ものを触って情報を得る。』ことに勝手に転換して理解した気になっちゃったのがこの学者先生だったのではないかと思うのです。いわゆる生態学者の典型的思考で、まったくベースの違う認知に関する理論を理解しようとした、した気になったということ。だからアフォードランスの説明にカブトムシを持ってきちゃったというわけで...

もう一つ、この先生の場合、アフォードランスで理解できる意味や価値というものをどうやら『効率』という言葉でだけ理解している節がある。事実はそのではなくて、前の方で書いたように食べたり、抱きしめたりといった極めて広範囲な意味や価値付に関わる理論として考えられているわけです。で、この二つの勘違いから先生はロボットが起き上がる時に関節などの機械的システムと重力とか下の床とかの関係(結局は触知覚)からあーだのこーだの取捨選択してより効率のいい形式を探りとして立ち上がるモデルの実験をアフォードランスと思い込んで紹介したわけで。だから、その延長線上で萬齋氏と双雲先生の実験(アフォードランスとはまったく関係ない)をやらかしちゃったということ。

例えば萬齋氏の場合に典型的に現れていますが、暗闇&目をつぶるという負荷をかけた時点で、本来のアフォードランスの要素はほとんど失われているということになります。足で探る動きがアフォードされたと先生は思っておられたようですが、これはアフォードランスではありません。探る=推論。しかも触知覚のみ。いずれもギブソン先生の理論とは相容れないものなのです。よしんばそれがアフォードランスだったとして、舞台から落ちるかもしれないリスクを萬齋氏にかけ

てまで行った実験の結果がそれほど貧しいものであっていいのでしょうか？何度も言いますが、萬齋氏はかえのきく実験動物ではないのです。

双雲先生にやらせた口で筆を加えての実験も同じ。こちらはロボットの立ち上がり実験と同じといえば事足りるでしょうか。いずれにしても、人間の、しかも秀でた才能と芸を持ったアーティストにやらせるような実験じゃない。だから私としては実に腹が立つことおびただしいのですが。

アフォーダンスとは一瞬にして働くもので、試行錯誤をその場で繰り返して行うものではありません。あくまでも累積された経験によって人間の中に作り上げられたものの価値や意味を認識するシステムがものの中に存在する価値や意味を表す情報＝データを一瞬にして読み取って対応するというものなのです。

つまり、子供でもパグとハスキーとダックスフントをすべてわんこだとどうして認識できるかの問題につながるともいえるわけで。この場合、子供の中にあるわんこのデータを認識するシステムに合致したデータを持つ生物を、子供は一瞬にして識別して『ワンワン♪』という声を上げることになるわけです。

この点において、いわゆるある種の決まった象徴的な形の中に意味を読み取る認知システムとしての型との関連が出てきます。また、萬齋氏と双雲先生が今まで積み重ねてきた経験の違い(狂言師と書家)から、同じものに対しても当然アフォードされるものが微妙に異なってくるはずだという想像も出てくるのです。この問題についてはまた次回に書くことにします。

○ちょっと上の項目に追加 **2006/07/30(Sun)**

ここでも一度志向性という問題が出てくると思うのです。

例えば、学者先生が萬齋氏や双雲先生にかけた負荷なるものそのものが一種の志向性であったのではないか。あるいは、試行錯誤して立ち上がろうとするロボットに志向性はあったのか。

これらはその認知という事象が持っている複雑さにかかわってくるような気がします。まあ、ロボットの場合はアフォーダンスでさえない単なる学習実験のようにも思えるんですが。

例えば、鉄砲の弾認知の例の場合、もの対人間という単純化された様式ではなくて、背後の存在が単なるマネキンか守りたい人なのかという志向性を持った別の要素が入り込んでいる。これは萬齋氏と双雲先生の場合も同様で、萬齋氏なら舞を舞うという志向性、双雲先生なら文字を書くという志向性にさらに学者先生による負荷という志向性までかかっている。『～をしよう。

』という言葉で変換される意思というものがそこに組み合わされている。これでは問題が複雑化しすぎて純粋な認知実験とは最初から言えなくなるのではないかと思えるのですが。

また、ロボット立ち上がり実験も同じ。立ち上がるという志向性だけ与えて、後はそのロボットの試行錯誤的学習能力に任せている。前に書いたロボットの場合は、システムとしての丸いボール型のものをつかむというプログラムだけを与えて、対象物と一対一の対応の仕方を示したものです。ものを認知する。ものの中の意味や価値を認知する。といった場合、どちらの方がこの言葉の意味を正確に表しているかはわかることだと思います。

で、萬齋氏と双雲先生の経験の差による微妙な違いということですが、これはあくまでも言語的なものではなく、より直感的、瞬時的な認知のみに関係する要素だけを扱う。と考えた方がいいかもしれません。言語が入ってくると、必ず推論というやつが出てきますから。いわば一次的認知といった方がいいのでしょうか。よくTVなどで心理テストをする時の、まずぱっと心に浮かんだものを教えてください。というのによく似ているような。つい、それでも人間というのはあーだのこーだの推論して答えちゃったりするんですが。まあ、この場合も、負荷をかけるほう(心理テストをする方)の意図的な志向性がかかっているんですね。

人間の存在ってのはどうしてもこういう複雑な様相ってのが必ずついて回ることになるのです。子供の『ワンワン♪』って言葉だって、見て認識するのはアフォーダンスでも最終的に出てくる言葉が何で『ドッグ♪』ではなくて『ワンワン♪』かということ、その子供は日本という文化圏で生きている志向性を持った存在だからというわけで…。考えれば考えるほどややこしくなる。

つまり、不用意に複雑な要素を入れ込んだままアフォーダンスを適用しようとしてこんがらがっちゃったのがあの学者先生だったのではないかとも思えるんですよ。まあ、その前に、アフォーダンスそのものについて上に書いたとおりの勘違いをやっているわけですが…。結局、ものの中の意味や価値を表す情報とは何か。人間はそれをどうやって認知するのか。肝心なこれが示されていなかったから、見ている観客もわけがわからなくなっちゃったのだといえるんでしょう。さて、閑話休題。話を戻すと、だから、アフォーダンスの実験をする時に変な負荷をかけたりして、関わる要素を増やしすぎたらダメということにもなると思うのです。

例えば、考えられるより単純化したアフォーダンスの実験をするとするなら、たとえばわけわからん不定形のオブジェをぱっと目にした時に、すぐ直観的に反応してください。と、萬齋氏と双雲先生に指示してパフォーマンスをしてもらおうとかでしょうか。すると狂言をやってきた萬齋氏なら動きとして表現するでしょうし、書家の双雲先生ならイメージを何かの文字に変換して書き始めるかもしれない。でも、これもやはり志向性といえるわけで。

蓄積された情報体系の多さと複雑さ。言語という要素。それによって構成される個々人の世界観

。そういうものを内包する人間を使ってアフォーダンスのより純粹で単純な実験をするというのは実に至難の業なのではないかとも思えます。だから、私としては、アフォーダンスというのは人間の認知において、要素として存在はするけれども、それだけで人間の行う認知活動や能力のすべてを説明できるものではないと考えた方がいいような気がするのですけど。

○行き着くところ 2006/07/31(Mon)

最後の萬齋氏の舞と双雲先生の書のコラボだけが、この日の実験として本来の意味のアフォーダンスに限りなく近づいたものだったといえるのではないかと思います。萬齋氏の表現する舞の中にある意味や価値を、双雲先生の中に今までの書家としての経験から作り上げられたものの中にある意味や価値を認知するシステムが認知して、それをそのまま書というパフォーマンスとして表現した。でも、結局これにも文化とか言語という要素がはいってるんですけど。個人的にはそれに無意識下に存在していた可能性とか拡大的要素も関わっているような気はしますが。そうでなければ、今までの双雲先生の書のパターン範囲で納まっていたはず。それを逸脱したということは、普段は使っていなかったより大きな普遍的要素や持っていたも気づかなかった可能性が発現されたということになると思うのです。ともかくこの実験は、学者先生のアフォーダンス理解では理解不能だったでしょう。実際はこちらの方がより本来の意味に近いのですが。

おまけに最後に『仏教的ですがまわりに生かされていると思うんです。』と締めくくられた日には...。認知行動における生態学的理解はおろかアフォーダンス本来の意味までも逸脱しちゃってます。どうやら行った方のお話によれば、萬齋氏、途中で先生の言う理論はどーでもよくなっちゃって、先生を置いてきぼりにして双雲先生と『～だよ～』の世界に行っちゃってたようですし...

それはそれとして、実は、萬齋氏、『解体』の中でアフォーダンスという説明はされていないのですが、まさにアフォーダンスそのものというパフォーマンスをすでにやっているのです。しかもそれは、観客までも巻き込んだものであり、芸能・芸術における象徴的形式や様式の持つ価値や意味のパターン認識に関わる型というものについて大きな示唆を与えてくれる実験だったのです。

...と書くと、勘のいい方ならひょっとしたら思い当たる方がおられるかも知れません。それは『解体Ⅰ』における萬齋氏とキム氏によるコラボ、特にラストに行われた『アヴェ・マリア』パフォーマンスです。

あれはまさに、直感で受け止められる形(姿勢)の意味や価値にのみ直接対応するリアクションの掛け合いの重なりで表現され、ゆえに、それ自体演者側の意図的な意味(志向性)が組み込まれていないにもかかわらず、『アヴェ・マリア』の曲とともに演じられたパフォーマンスそのものが観客

に『エロチシズム』というイメージをアフォードさせた。という形式においてアフォードダンスの実験そのものといってもいいものだったと思えるのです。

この場合、言葉と深く関わる文化に属する『もののあはれ』とは異なり『エロチシズム』というものは、人間という生物の中に最初から組み込まれている本能的性質とともに深く関わる要素であることから、より根本的で純粋な意味や価値といえ、よりアフォードダンスの本来の定義に近いシステムが働いたといえるのではないかと思えるのです。

ここに芸術・芸能におけるアフォードダンスの本当の意味、働きが表現されていると思うのですが...。型という小さな問題にも関わりますし、舞台芸術として表現されるものそのものにも関わるような気がするのです。萬齋氏としてはおそらくそういう方向に話を持っていきたかったのではないかと思うのです。

今回なぜ双雲先生という書家を招いたのかというと、書家の書く文字は何かアフォードされた結果生み出された形であり、その形が見る人にとってまた何かをアフォードする。また、もともと漢字そのものが象形文字から生み出されたものでもあり、本来的にその形の中に何かをアフォードする要素を持っているということもあったでしょう。

結局それが、アフォードダンス理論そのものと芸能・芸術に対する理解の浅い学者先生(日本では本をいっぱい翻訳すると権威と称されることになるらしいです)を招いたことでわけのわからんものになってしまったということなのでしょう。実に残念なことだったと思います。

だから、今回、観客が何がなんだかわからなくて当たり前だったのです。学者先生がわかっていなかったのだから。

ということで、アフォードダンスについての解説を終了することにします。これで少しでも今回の『解体』に行かれて混乱した方の気持ちの整理に役立てばと思います。ご清聴(とっていいのか・・・。笑)ありがとうございました。

念のため

私はアフォーダンスの専門家ではありません。ただ『認知科学』のアフォーダンスの項目について読んで理解したところを述べているだけです。

ゆえに勘違いや間違いの類がある可能性もありますので、そのあたり、一応お断りしておきます。

ただ、主に古典芸能における型の概念。こういうふりをすればそう見えるというもの。そう感じることができるというもの。それが究極まで研ぎ澄まされ余計なものはぎとられた形。それがどう観客に作用しているかという点でアフォーダンスの概念は実に面白いものだと思っています。

できればもう一度リベンジして欲しいくらいの内容です。

阿呆がダンスダンスダンス♪

<http://p.booklog.jp/book/39508>

著者：三浦礼未

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/remi-miura/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/39508>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/39508>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.